

声にならない言葉

日テレ学院学院長

石川 牧子

アナウンサー採用試験の季節になると、大學生がエントリースートを手に、「これで大丈夫ですか？」と聞きにやって来ます。そう問われて、私はいつも戸惑ってしまいます。その「大丈夫」と口にしたら、その学生はどのようか。試験に受かる、と信じてしまうのでしょうか。あるいは、エントリースートにミスはないようだけど、受かるかどうかは別問題、と感じてくれるでしょうか。学生の必死な様子に、私はいつも答えに迷ってしまうのです。大丈夫と聞かれたたった一言に、心がグラグラするのです。

“大丈夫”は、**ダイ・ジ・ヨウ・ブ**。と五つの音。アナウンサーとしての経験では、五つの音（五文字）は一秒です。つまり、五つの音を口から出すのに一秒という時間を要するのです。

日本人は、俳句（五・七・五）や短歌

（五・七・五・七・七）を楽しみ、五つの音（五文字）に親しんできました。

こん・に・ちは　こん・ばん・は　あ・りが・どう・す・み・ま・せ・ん　お・せ・わ・さ・ま　が・ん・ば・つ・て・ね　お・と・う・さ・ん　お・か・あ・さ・ん　あ・す・は・あ・め　あ・す・は・は・れ　き・を・つ・け・て……等。

無意識のうちに私達の口について出る言葉は五つの音（五文字）でできていることが多く、まばたきを二度繰り返せる一秒という時間なのです。

さらに、日本語では“ん”を音扱いにはしません。だからアイウエオを元に生まれます。だからアイウエオは母音と言われるのです。その母音であるアイウエオという一秒の順列組み合わせによって、私達は様々な言

葉を作り、発しているのです。

「つまらない」と思っている人は、「ウアアアイ」、「楽しいな」とつぶやく人は「アオイイアア」と並べているのです。全ての言葉は、わずか一秒で言える“アイウエオ”の並べ替えでできているのです。

不安で暗い気持ちになっても、ちょっとした言葉の工夫で、元気が出たり勇気が湧いてくることもあるのです。

私がかつて親の介護の真似事をしていた時、つい“大変だ”と思いがちでしたが、“楽しんでやってみよう”と言葉を置き換えてみると、不思議と乗り越えられるのでした。そして七年前の母の介護の末に、父が私に言ってくれた言葉は“ありがとう”でした。疲れ果てていた父の声は小さく聞きとりにくいものでした。が、たった一秒の五文字の言葉は、それまで

の介護の疲れとストレスから、私を一瞬のうちに解放してくれたのでした。まばたき程の、あっとい間の一秒の言葉も、時に心にしみ

いる大きな力を発揮するものなのです。一秒“アイウエオ”の順列組み合わせを活かさないわけにはいきません。誰もが皆持っている言葉と、その人の知恵と工夫を少々働かせることで、一日を、いえ人生を豊かで楽しく過ごすことができるのです。

以前、ある会場で介護の経験を語ったことがあります。出口が見えないといわれる介護をどう乗り越えたかを含め、“言葉には力がある”等の話をしました。そのあとの質問の間に会場から二〜三手が挙がり、最後の質問者に移りました。「末期ガンで苦しんでいる知人に、どのような言葉をかけたらいいのでしょうか？」初老の女性はさすがのような目で私に問いかけました。もしかしたら末期ガンはその方の御主人なのかもしれない……と感じつつ、頭をフル回転させました。しかし、必死に答えを探しましたが見つかりません。考えても考えても、心にどう向き合っても、どうしても言葉が思い浮かびませんでした。どれ位の時間が経ったでしょう。大勢の人の前で、オロオロしながら私は言いました。

「すみません。言葉が見当たりません。そのような状況では多分言葉はありません。」

“言葉には力がある”と語ってきたのに、とても恥ずかしかったことを思い出します。ところが私の答えに、質問者の女性は納得したかのように、首を大きく縦に振ってくれたのでした。が、私の頭の隅には、答えられなかったことが割り切れない思いとして、長い間刻まれました。

やがて、私は音のない言葉・声なき言葉があると気づいたのでした。それは、あたたかな目差しであったり、あたたかな手の触れ合いであったり……。

精神的にダメージを受けていた時、「頑張つてね！」と声をかけてくれるより、ただ黙って背中をポンと叩いてもらったほうが嬉しかったり、病気療養中に時間をかけて手をさすってくれたり、ニコッと笑顔を見せてくれたり、妙に心の落ち着きを覚えたりして、信頼の絆を深めることもありました。以心伝心なのか、“間”ということなのでしょう。言葉には音にならない素晴らしい言葉もあるのです。

さて、エントリースートを手に私の元へやって来る学生には、どう対応しましょうか。

学生の書類に目を通し、大きく頷いてみましょうか。ニコリと笑みを浮かべてみましょうか。それとも首をちよっぴり横に倒してみせましょうか。いずれにしても、多分一秒位しかかからないはず。今年も心がグラグラする季節がやって来るのです。

石川 牧子（いしかわ まきこ）

山形県鶴岡市出身。

1970年日本テレビにアナウンサーとして入社。「アメリカ横断ウルトラクイズ」、「NNNジャストニュース」、「横浜国際女子駅伝」などを担当。97年には在京テレビ局初の女性アナウンス部長に就任。現在は、日テレ学院学院長として後進の指導にあたるほか、株式会社日レイベント常務取締役、仙台大学客員教授、日本ゲートボール連合理事も務める。『緑のハイヒール』（日本テレビ）、『お母ちゃんが起きられなくなった』（小学館）、『言葉って生きているから面白い』（ワニブックス）ほか著書多数。

